

金相寺 寺報

遇

～ぐう～

Encounter magazine "Guu"



親鸞聖人行脚像

3月

March 2013

No. 4

かみこ くじゅうねん  
紙衣の九十年

親鸞聖人はおよそ八百年ほど前、京都に誕生され、九十歳でお亡くなりになりました。

その人生を通してお伝え下さったお念仏の教えは今もなお、人々の心に響き、生きる勇気と力を与え続けています。悪人正機説や肉食妻帯されたということで有名ですが、一体親鸞聖人とはどのような方だったのでしょうか。

ここでは親鸞聖人のご人生について共に触れていきたいと思いをします。



● 大乗院の夢告

磯長しながの夢告むこくより九年経った正治二年十二月月上旬、二十八歳なられた親鸞聖人は、目前に迫る一大事の後に懊悩おうれうなされて、比叡山の南、無動寺の中にある大乗院だいじょういんにこもり切られるようになりました。

そして参籠さんろうの満願まんがんにあたる十二月三十日の真夜中、如意輪観音にょいりんかんのんが現れて親鸞聖人は再び夢告にあずかったことを記されています。

善よいかな善よいかな、汝まが願まい、將まさに満足せんとす

善よいかな善よいかな、我が願まい、亦また満足す

(おまえの後生の一大事、解決できる日は近いぞ。絶望せず求め抜け、私の任務も終わろうとしてい)

というもので、これを大乗院の夢告といわれています。

これは、磯長の夢告において

汝まが命根は、まさに十余歳なる

べし。命終わりて速やかに清浄土に入らん。善よく信まぜよ、善よく信まぜよ、真の菩薩を

と告げられたことに対する問いが、今まさに明らかになるうとしていることを意味しています。

親鸞聖人にとって、この時、まさに阿弥陀仏の絶対の救いが眼前に近づいていたのです。

この阿弥陀仏の絶対無二の救いに遇わせることが、一切の諸仏、菩薩の唯一の任務でありますから、如意輪観音もその使命を果たせる喜びを夢告した物と思われまます。

この後、親鸞聖人は二十年間修業された比叡の山を遂に下りられることとなります。次回お楽しみに！



比叡山の根本中堂から大乗院への道



【玉折】

去年暮、師走も下旬を迎え、拙寺でも修正会の準備に忙しくなり始めた頃であった、四十年来親しく御縁を戴いている方で、古稀もだいぶ過ぎてはいるが、今尚四十年以上続いている会社の社長として、精力的に活躍されているS氏から電話が掛かってきた。

「今、九州の博多から電話をしている。実は私の二十五歳になったばかりの孫娘が、昨夜事故で亡くなった。就いては今後のことで相談したいので、明日伺いたい」との内容の電話であった。その亡くなったお孫さんとはお会いしたことはないが、翌日愚生も重苦しい思いを抱きながらS氏の来られるのを、お内仏に手を合わせながらお待ちしていた。

昼近くになってS氏は来られたが、愚生の顔を見るなり、大きな眼に一杯の涙を浮かべ、声を詰まらせ佇んでいられる。その様子を見て愚生は聊か驚いた。というのは、四十年程前S氏に初めてお会いした時、「豪放磊落な性格の方だ」との印象を受けたので、この人はどの様な事があっても、人前で涙を流すことなどないのだろうと思っていたのだが、豈図らんや、想像だにもしなかったS氏の様子に、愚生も戸惑いを感じたのである。

暫くして落ち着かれたS氏が詳しく事情を話されるには、「二十五歳を迎えたばかりの孫娘なのだが、誕生祝を勤務先の同僚が催してくれ、その帰りに大型トラックに轢かれ、帰らぬ人となった。自分の長女の娘で、外孫なのだが、中学・高校と私の家から通い、大学はアメリカへ留学し、語学が堪能で、スポーツも万能であったので、入社した大手企業からも大変に期待されて、博多支社に勤務

していた。我が子以上に可愛がって育ててきたので、この様な事になるとはいまだに信じられない。今まで順風満帆な人生を歩んできたが、この歳になってこの様な堪え難い苦しみ、悲しみを受けようとは」と大きな体を凋ませながら、涙ながらに語られるその姿に、愚生も我が愚妻も涙せずにはいられなかった。

『白骨の御文』に「人間のほかなき事は、老少不定のさかいなれば」とある。何人も明日の保証はない身である。死の原因は申すまでもなく生まれたことにあるが、その縁は無量である。

仏教の根本の教説の一つに「諸行無常」がある。この教えは、吾人の身に切実に迫ってくるのは「生者必滅会者定離」と云うことであろう。「生あるものは必ず死に帰する」という事は、五歳の幼児にも分かることかもしれないが、七十の老軀を迎えても、なかなか体解できない事である故に、我々は日常、馴れに惑わさ

れ、我が「いのち」は永遠である如く錯覚して生きている。

『仏説無量寿経・下巻』正宗分の初めに「世人、薄俗にして共に不急の事を諍う」とある。明日のい

のちも分からぬ身でありながら、どうでもよい事を一大事の如く争い生きてはいないだろうか。我々は日常の馴れで、眼が見えるのも当たり前、耳が聞こえるのも当たり前として生きているが、全て不可思議な用きによつて生かされている。

長野の善光寺に戒壇巡りというのがある。愚生も体験したことがあるが、全く光の届かない廊下を手摺を頼りに進むのであるが、手摺がなかったら一步も進めない。この戒壇巡りについて愚生の勝手な解釈を云わせていただければ、どの様なよい眼を持っていても、光がなければ全く用きをなさない。これは眼だけの事ではなく、我々の生活全てに云える事ではないか。さすれば何人も自分の力で生きているのではなく、不可

思議な用きに生かされているのだということに覚めた時、そこに僅かな救いがある事を教えてくれている」ということではないか。



長野・善光寺の戒壇巡り入口

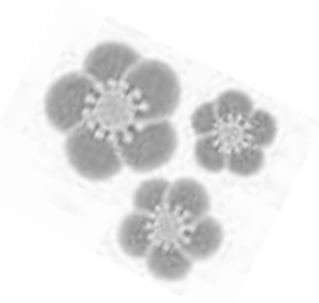
日常生活の馴れが、世のぐるりの実相を見る目を冥くし、曇らせている。「尽日咫尺して刹那も遇わず。

億劫に相別れて須臾も離れず」という箴言がある。家族と一日中一緒に居ながら、実はその陰影というか、虚像としてしか会っていないのではないか。永別して初めてその事に気が付かされたりするのである。

この二月にS氏のお孫さんの尽七日の法要が、横浜の実家で勤められ

た。その折、あれ程打ち沈んでいたS氏が、先の豪放な相を取り戻していることに再度驚かされた。S氏の云うには、「近頃亡くなった孫がよく私に話しかけてくるんです。『私は仏さまのお浄土で倅せにしているから、心配しないで。お爺ちゃんこそ元気で一日一日を大事に生きて。迎えが来たら、またお浄土で遇える日を楽しみにしているよ』と。孫に教えられましたよ。今は一日一日を大切に生きていかなければと思っているんです」と。明るい顔で仰るS氏に接して、「億劫に相別れて須臾も離れず」とはこの事かなと思ひ、愚生も有難い御法事に遇わせて戴いたと、手を合わせずにはいられなかった。

成田 宣信（金相寺住職）



# 御同朋の声

## 【私とお寺と子ども会】

常盤 ひろ美氏

こんなにも早くお寺とお付き合  
いが始まるとは、夢にも思っており  
ませんでした。

それは四年半前、「首が腫れてな  
い？」の主人のひと言から、軽い気  
持ちで病院を受診したことからは始ま  
りました。初めに医師の口から出た  
言葉が「奥さん、これからどうぞさ  
れますか」でした。私にはそれがどう  
いうことなのか、すぐには理解でき  
ませんでした。というよりは、その  
言葉を受け入れたくなかったのだと  
思います。

それから二年、私たち夫婦は病気  
と向き合い、闘いぬきましたが、残  
念ながら二年半前の春、五十歳とい  
う若さで主人は旅立っていきました。

その旅立ち（葬儀）の時、こちらの  
副任職にお世話になり、現在に至っ  
ております。今思えば、二年間とい  
う期間は、私がこれから生きていく  
為の準備期間だったのかもしれない  
ん。

四十九日の法要を済ませ、その年  
の暮、ご挨拶に伺った時のことです。  
私子ども達に携わる仕事をしてい  
ることをお話しさせていただいたこ  
とが、子ども会に参加させていただ  
くきっかけになりました。翌年の夏、  
教え子の子ども達と、そのお母様方  
と一緒にお弁当を持って遊びに行っ  
て以来、毎回子ども会に参加させて  
いただいております。

子ども会といっても、難しいルー  
ルがあるわけではなく、誰もが気軽  
に参加でき、みんなで作っていく会  
です。お勤めをしたり、お坊さんの  
話に耳を傾けたり、みんなと一緒に  
遊んだり、お弁当を食べたりする中  
で、楽しいことや悲しいこと、時に  
は辛いこと、我慢することなど、た  
くさんの経験を通し、心豊かに成長

していつてくれると同時に、私たち  
大人が共に成長していける、そんな  
会であればと思っております。

子ども達もやがて子ども会を卒業  
する時がやってきますが、その後も  
気軽に足を運んでくれて、あとに続  
く後輩たちに、自分たちの経験や思  
いを伝えていつてくれ、それがまた  
次へとつながっていく、いつでも帰  
ってこれる、そんな場所であってほ  
しいと願っております。

私にとって子ども会は、主人の死  
を通して出遇えた素晴らしい縁だ  
と思っておりますので、影になり日  
向になりながら、いつまでも大切に  
かかわっていかれたらと思います。も  
し皆さんの中にご自分が体験された  
ことや、これは子ども達に伝えたい、  
伝えていきたいと思うことなどござ  
いましたら、是非  
一度子ども会に遊  
びに来ていただき、  
お力をお借りでき  
れば幸いです。  
ます。



# 正信偈勉強会

## 学習報告

### 【原文】

摂取心光常照護 已能雖破無明闇  
貪愛瞋憎之雲霧 常覆真實信心天

### 【読み方】

摂取の心光、常に照護したまう。  
すでによく無明の闇を破すといえども、貪愛・瞋憎の雲霧、常に真實信心の天に覆えり

### 【意識】

すべてをおさめ取られる慈悲の光は、常に照らして護って下さる。すでに無明の闇は破られてはいるけれども、欲望と怒り憎む心が雲や霧となって、常に真實信心を上から覆っている

「真實信心」という言葉には、少し注意が必要です。私どもの「信心」が、どうして真實であるのかということですが、「信心」は、私どもの判断で、信じるか信じないかを決定する信心ではありません。愚かで間違いの多い私どもが決定する信心であるならば、どうして「真實」といえるでしょうか。それは阿弥陀仏から振り向けられた信心なので。自力によって引き起こす信心ではなくて、阿弥陀仏からいただく、他力の信心です。だから、その「信心」は「真實」なのです。

私どもは、自らが引き起こす「貪愛」や「瞋憎」によって、せっかく回向されている「真實の信心」を覆い隠して、それを自分から遠ざけているのです。けれども、阿弥陀仏の大慈悲心の光は、そのようなことでは覆い尽くせるものではないと、親鸞聖人は、この次の句に詠われます。

(『正信偈の教え・上』本文より)

### 所感

他力本願とは、一体いかなることなのか。そんな人任せでいいのか？もつとやれることは精一杯自らの力で頑張るべきなのではないか？そのような声が、今回の勉強会では聞こえてきました。

しかし、ここでいう他力本願とは決して怠惰から来るような、無責任な態度をいうわけではなさそうです。私たちとはどこまでも自らの思いや力など、自己を絶対化して生きています。しかし、そのように絶対化している自己こそが、真實に暗く、間違いだらけの存在であるということです。それを阿弥陀如来は教えて下さっているのです。その阿弥陀如来のはたらきに私たちが出遇えた時、罪深き我が身を知らされると共に、そのような私をこそ必ず救い遂げようと願い誓われている阿弥陀如来の深い慈悲の御心によって生かされている我が身を教えられるのですね。

釋宣明

副住職の

# 日々の出遇い



## ● 子ども会・青年会合同開催 報恩講のご報告

昨年十一月十日(土)、当寺報恩講の前日、子ども会と青年会合同で親鸞聖人のご命日の集い・報恩講をお勤め致しました。

今年はお勤め後、親鸞聖人のご法事をお勤めしていることをみんなで確認し、お焼香をしました。



慣れない所作にお父さん、お母さんの方が緊張していましたね(笑)

続いてお話しをしていたいただきましたのは、神奈川県横浜市の真照寺副住職・雲井一久くもい かずひさ先生です。

お話は「いのちの長さ」と重さ」ということについてお話しいただきました

した。みんなで「いのちの長さは違うけれど、いのちの重さはみんな一緒」と声に出して確認しました。また、お話の途中で地獄の絵本も読んで下さいました。



子ども会だけでなく、青年会にもご参加いただき、日頃より大変お世話になっている雲井先生

お話の後は境内でお楽しみタイム。お餅とけんちゃん汁を食べたり、境内で遊んだり。あつという間に時間が過ぎてしまいました。

今回も、多くの方々にご参加いただき、ありがとうございます。次回の子ども会は4月1日に花まつりの開催を予定しています。是非有縁の方々をお誘いあわせの上、ご参加下さい。また皆さんにお会いできることを楽しみにしています。

# 今後の予定

## 法要

三月二十日 春彼岸会  
七月十六日 孟蘭盆会  
九月二十三日 秋彼岸会  
十一月十日 報恩講

## 勉強会など

四月一日 午後二時～  
子ども会 花まつり

※ 詳細はホームページをご覧ください

四月六日 午後二時～

正信偈を学ぶ会（輪読・座談会）

※ 以後、偶数月（六・八・十・十二月）の  
第一土曜日に開催予定。

毎月一回 仏教青年会

※ 毎月の開催日等、詳細はホームページを  
ご確認ください。どうか電話・メールにてお問  
合せ下さい

予定は都合により変更する場合がございます。  
詳細は随時ホームページをご確認いた  
だくか、電話・メールにてお問合せ下さい

## 編集者雑感

最近の体罰の問題などを見ていて、世間の反応に少し恐ろしさを感じる。現代は何が真実かわからないほど多くの情報がメディアやネット上で流れている。にもかかわらず、私たちはその真偽問うこともなく、表面上に見えるものだけを安易に受け取り、平気で感情的な他者批判ばかりしていないだろうか。全く責任のないところでの批判こそ悪であり、見えない他者の存在を殺す行為ではなからうか。そこから一人ひとりが自らの問題として問われるということがない。

人間が作り出す地獄の世界と阿弥陀の浄土、その絶対的な違いは、まさに自らの存在が問われ、また他者に対して、その存在を認め、赦し合うことができるかどうかではないだろうか。悲しいかな人間には無理なのだろう。だからこそ、阿弥陀如来は私にその悲しみの存在を知らせ、必ず救い遂げるとの願いをもって呼びかけて下さっているのだ。どこかの誰かの問題としてではなく、今ここの私の問題として阿弥陀如来より問われ呼び掛けられているのだ。

合掌

『遇くぐう』第四号

発行 浄土真宗 霊苔山 金相寺  
副住職 成田 宣明

〒252-0328

神奈川県相模原市南区麻溝台726-1

TEL&FAX 042-778-2879

e-mail konsouji@aria.ocn.ne.jp.

URL <http://www6.ocn.ne.jp/~konsouji/>

発行日 二〇一三（仏歴二五五六年）年三月一日